

# つもる蔵詩

かつての日本家屋の暮らし。

母屋の傍にあった蔵には、生活における大切なモノをしまい、必要に応じて母屋に取り出し暮らしていた。

蔵によって、母屋は暮らしが展開される舞台となり、内や時代でうつろう風景はそのまま町の風景となった。そして蔵の中には、一家の暮らしの記憶がゆるやかに宿される。

現代に消えつつある住戸間の絡まりのきっかけを、かつての暮らしの風景から見出し、時の重なりを許容する次世代の暮らしを提案する。

**01 町並みの「連立」** 過去、住戸が持つ別々のものが、横になって成り立っているもの。昔のこの地域の住宅地では、単一の敷地に質の領域がせめぎ合うように建設され、各々の住戸が「孤立」した町並みとなっている。そこで、町並みによる領域の形成から、暮らしのモノによって閉まれる領域の領域へと関係を変え、町並みの「連立」を図る。



**孤立した町並み**  
暮らしが敷地の内部で完結しているため、住戸間に絡まりのない町並みが生じる。



**収納の壁**  
隣接する住戸の壁に収納の機能を転写し、住戸間に住み手のモノによる領域の領域をつくる。

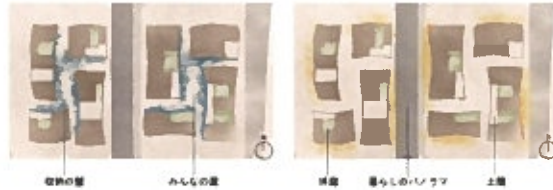


**連立する町並み**  
住戸間に抜けをつくる。モノは町並みのファサードとなり、各々の暮らしの中庭が生まれる。

## 02 配置計画

**入隅**  
収納の壁によってできた路地裏の空間に、モノが蓄積され、「みんなの蔵」となる。

**出隅**  
各住戸が町に背けてバナナ型に展開する暮らしの舞台となる。



収納の壁    みんなの蔵    出隅    暮らしのシラフ    土間

### 続き間

生活シーンに合わせて柔軟に間取りを変更できる。

### 坪庭

通風と採光の機能を越え、四季の移ろいを住戸内に引き込む。

### みんなの蔵（東側）

高校生の通学路として利用されるなかで、全体作品が蓄積され、路地裏の図書館となる。

### 軒の出のバス停

蔵にかかる軒の出も町の一部に還元される。

### 寛容する住まい

住戸は空家となっても、みんなの蔵に蓄えられた物によるふるまいの舞台となり、町の中に見える。

### みんなの蔵（西側）

公園と連続しており、休憩場所としても利用される、小さく落ち着けるスケールとなるよう計画した。

### 土間

引き戸を倒し「みんなの蔵」と住戸内を一体の空間とすることもできる。



## 03 暮らしがつもる「みんなの蔵」

「みんなの蔵」は居住者のモノだけに限らず、高校へ通う生徒の通学路や公園の延長としても利用され、地域の人々やものが集まる。この空間はみんなの暮らし・コミュニティ・モノ・記憶が蓄積され、街並みと地域文化の中心となる場所である。



## 04 町に展開する暮らしの風景

町に開かれたファサードは土壁で塗装することで、更新が可能な恒久的な佇まいとなる。そこに設ける窓は、ヒッチャーウィンドウとして暮らしの風景を町に映し出し、裏側にあるみんなの蔵における景観によって、その風景を変える。



## 05 暮らしと「みんなの蔵」を繋げる土間空間

各住戸には「みんなの蔵」に続く土間のスペースを設け、その関係が緩やかに繋がるように計画した。住戸内の暮らしが自然と「みんなの蔵」に展開し、流動的な住戸間の絡まりを生み出す。

